

存在は奥さんも認めていました。最後は奥さんのもとで亡くなりましたが、アメリカでもこんなことがあるのです。この編集長は仕事のできる人でした。奥さんと愛人との間で思い悩み、その辛さや悩みを忘れるように仕事に没頭した結果、評価が上がったのかもしれませんが。池波氏は真面目に仕事に打ち込む反面、私生活では反道徳的なことをしてしまう、そんなもろい人間というものを真正面から肯定していたんだと思います。

現代は物事を白黒はっきりつけたがる風潮ですが、物事の中にある人間の思惑みたいなものを無視して、結果だけを求めているような感じがします。あまりにも白黒はっきり結果を求めすぎると、そのうち社会にひずみが生じてくると思います。つまり物事を一方的に決め付けるなということです。他人に対していいことだと思ってやった行為が裏目にでたり、逆に自分が意図していないことでも感謝されることもあり、人間の心はそう単純ではありません。

例えばアメリカは白黒はっきりさせることが大好きです。アメリカの思惑の外にいる国に対して「黒＝悪」と言い切ってしまう圧力的な態度に出ています。イラク問題にしてもそうです。武力で頭ごなしに押さえつけるのではなく、他のやり方があったと思います。そしたら今の「血で血を洗う」ような泥沼状態を避けられたのかもしれませんが。その点、長谷川平蔵は人を見つめ、心情を察しながら問題解決の「落としどころ」を見いだす事が非常にうまいです。当事者双方が納得するかたちを探っているからです。

「鬼平」の中で長谷川平蔵は「人間というやつ、遊びながら働くものさ。善事を行ないつつ知らぬうちに悪事をやってのける。悪事を働きつつ知らず識らず善事を楽しむ。これが人間だわさ。」と度々言っています。

私は直球ばかりを投げるのではなく、時にはカーブを投げることも必要だと思います。白黒はっきりつけなくても、感じるままの姿で灰色があってもいいと思っています。人生とは理屈では決められない中間色にあるんだと思います。この1年間多くのことを勉強させていただきました。皆様に感謝し本日の話しといたします。

6月29日例会：会長幹事慰労会 18：30～ 於三条ロイヤルホテル

7月6日例会：クラブフォーラム方針発表

7月13日例会：「識字率向上月間」

7月20日例会：細井A G公式訪問「クラブ協議会」

7月27日例会：28日に例会日変更

7月28日例会：3 R C 合同例会横山G B 公式訪問 12：30～ 於ハミングプラザV I P



Lend a Hand

会長／山本 賢
幹事／西山 斉
SAA／小林 繁男

三条北ロータリークラブ週報

手を貸そう

例会日
2004. 6. 22
累計 No 855
当年 No 48

国際ロータリー会長 ジョナサンB.マジアベ 第2560地区ガバナー 原 信一
ホームページ <http://www.rotary2560.net>

例会日／火曜日 12:30～13:30

例会場／三条ロイヤルホテル TEL34-8111 FAX34-8114

事務局／三条市西四日町3-15-34 ヒューマン・ハーバー内

TEL35-7160 FAX33-8972

メールアドレス north@sanjo-nrc.org ホームページ <http://www.sanjo-nrc.org>

行事：「今年度を振り返って」山本 賢会長

出席：本日の出席 60名中 38名

先々週の出席率 60名中 48名 80.0%（前年同期83.05%）

先週のメイクアップ：6月15日 社会奉仕事業選考会（敬称略）

阿部勝子、大橋政雄、岡田 健、落合益夫、木宮 隆

斎藤 正、佐藤義英、高橋彰雄、中條耕二、梨木建夫

羽賀一夫、樋口金占、淵岡 茂、堀川正幸、本間建雄美

山上茂夫、山崎 勲、米山忠俊、山本 賢

22日 田上あじさいR Cへ 青柳康博さん

ゲスト：（社）青空福祉会 代表 名古屋順次様

会長挨拶：山本 賢会長



今日も死について、代表作に「納棺夫日記」がある富山県出身の作家青木新門氏の『生死一如の「ありがとう」』を引用して話させていただきます。生死一如とは仏教の言葉で生と死を切り離すことはできないという意味です。

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を読んだり、詩が美しい感ずるのは生と死を複眼的に捉え、生死一如の光の世界を現出させているからだと思います。

今、日本人の多くが「生・老・病・死」の中の、生きている間の「生」だけが善で、「老・病・死」は悪と思っているところがあります。青春は美しく、老は醜悪で、死は忌み嫌うものという観念があるからです。

例えば、川端康成はノーベル文学賞を受賞しましたが、その数年後に自殺しました。一説には痴呆とノーベル賞とのギャップを埋める為に命を絶ったと言われています。また、三島由紀夫は割腹自殺をしましたが、彼は自作の「鏡子の家」の中で「もし人間の肉体が芸術作品だと仮定しても、時間に

蝕まれ衰退してゆく傾向を阻止する事はできないであろう・・・最上の条件の時における自殺だけが、それを衰退から救うであろう」と書いています。人にはそういう美を支持する年代があります。しかし、「生」だけに重点が置かれ、「生」こそが「善」であるとするシステムを悲しく感じます。病院でさえ霊安室に向かうのは「悪」であり、正面玄関から帰ることだけが「善」とされます。「死」を「悪」とし隠蔽する社会が、おそらく神戸の「少年A」のような事件をもたらすのではないかと思います。

A少年は供述書の中で「おばあちゃんが小学校の時亡くなった。大事なおばあちゃんを僕から奪ったのは『死』というものだ。僕は『死』というものが何かを知りたくて蛙やナメクジ、猫も殺してみた。でも、『死』というものがよくわからなくて、やはり人間を殺してみなければわからないと思った」と言っています。A少年はおそらく大好きなおばあちゃんの「死」に直面しておらず、苦しみや悲しみに出会っていないのです。それは親が「死」を見せまい、与えまいとしてきたからで、そのツケが現れた事件だったと思います。

他人の「死」や、映画、漫画の中の「死」を見ても、人の命の尊さを感じることは難しく、本当に愛している人の「死」に出遭った時の苦しみや悲しみが大事なのです。ある高校生が祖父が亡くなった時に書いた作文です。『おじいちゃんが亡くなる朝、おじいちゃんがおばあちゃんに「この後どうなるもんかねえ。」と言った。すると、おばあちゃんが「一緒にまいりましょうね。」と言った。おじいちゃんは「ありがとう。ありがとう。」と言って安らかに逝きました。あの光景は言葉ではとても言い表せるものではありません。』

「どうなるもんかねえ」と言う「そんな縁起でもないことを。がんばりましょうよ」と答えるのが、今の遺族です。孫も会社の人も看護師も医者もみんな「がんばれ」と言います。つまり生きている事が大事で、死んだら「無」になるからがんばって生きろ、ということです。「一緒にまいりましょうね」と言える素晴らしさ、孫達がきちんとおじいちゃんの死を受け止めている素晴らしさは、まさに「生死一如」を見る思いがします。

幹 事 報 告： 石川友意次年度副幹事

・巻RCより 7月から例会場変更のお知らせ

新会場 ベストゴルフマキ

・地区高頭副幹事より クラブ奉仕関係部門、地区拡大部門反省会のご案内

日時 2004年6月28日（月）18：30～

会場 鴨川本館（長岡市）

・次週は会長幹事慰労会です。三条ロイヤルホテルにて18：30点鐘

例会は6階、慰労会は2階となります。また後日ご案内致しますが17：30から新旧合同理事会を開催します。関係理事役員の方は宜しくお願いします。

ニコニコボックス： 22日現在累計 1,072,000円

羽賀 一 夫 君 ピンチヒッターで会長挨拶をごく手短かにしようと思ったのに残念です。でも点鐘は最高の出来でした。

神田 敬 宏 君 父の日のウナギ特売におゝ乃さんからご協力していただきありがとうございました。

洩 岡 茂 君 会長の話の途中で失礼します。1年間御苦勞様でした。昨年末に山本会長に声かけられ小生は大変です。御協力を。

外 山 晴 一 君 山本会長一年間ご苦勞様でした。

堀 川 正 幸 君 心配したほどの被害もなく台風が通り過ぎて、また夏の日ざしが戻ってきました。よかったよかった！山本年度最後の追い込みどうぞよろしく！！

安田 貞 夫 君 B O Xに協力

山 崎 勲 君

*（社）青空福祉会にスマイルB O Xより200,000円を寄贈

今年度を振り返って： 山本 賢会長

この1年間を振り返り、まず最初に私を会長にいただき、また皆様には多くの力を貸していただき大変ありがとうございました。皆様の支えがあったからこそ、やり遂げる事ができたと感謝しております。そして貴重な体験や社会経験をし、色々な方々と出会えることができました。私は三条に来て16年になりますが、ロータリーに入会した事により心身ともに苦しい時期を乗り越える事ができたように思います。

そこでこの1年間を通して特に感じたことを話させていただきます。

現代と江戸時代をすり合わせて書いた、火付盗賊改方長官長谷川平蔵の活躍を描いた「鬼平犯科帳」を皆さんはご存知でしょうか。これは作家池波正太郎の代表作の1つです。他に「剣客商売」や「仕掛人・藤枝梅安」などの著書があり、登場人物が私達と同じように悩み、悲しみ、喜ぶ姿が鮮やかに描かれ、絶大な人気を誇っています。

池波氏は1990年に急性白血病で67歳で亡くなりましたが、彼の作品は死後14年経った今でも時代の移り変わりに左右されず、いつ読んでも新鮮味が損なわれない為テレビドラマ化され、書店では特集が組まれ平積みされています。

池波氏の代表エッセー「男の作法」の中に「人間とか人生とかの味わいというものは、理屈では決めれない中間色にあるんだ。つまり白と黒との間に。その最も肝心な部分をそっくり捨てちゃって、白か黒かだけで全てを決めてしまう時代だからね、今は」とあります。

「鬼平」に出てくる盗賊は盗みを働く一方で人助けをする場面がよく出てきますが、これは現代にも通じるものだと思います。池波氏の人生観は「人間は矛盾の塊」「悪事をしながら善事もしてしまう」というもので、彼の作品では常にそれが語られています。

話は飛びますが、アメリカのある雑誌の編集長が92年に亡くなりました。この編集長は本当に実直な方でしたが、死んでから40年以上も続いていた愛人がいたことがわかったそうです。そして愛人の